二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

白翼の姫騎士 ナイトスワニィ

KNIGHT SWANNY

小説 大熊狸喜
挿絵 もりたん

プロローグ　白鳥と少女姫　006
第一章　変身騎士（ナイト）は二刀流!!　009
第二章　二人の姫君　026
第三章　晩餐会の罠　042
第四章　暗黒の騎士　ダークスワニィ　055
第五章　白翼の姫騎士　淫獣奉仕　127
第六章　白翼の売春騎士　ナイトスワニィ　189
エピローグ　光の世界　243

登場人物紹介

Characters

シルキス

国民の多くから慕われている、ララマザー芸術王国の姫。「ナイトスワニィ」に変身し、人々を苦しめるジュエル魔獣と戦う。ナイトスワニィの正体は誰も知らない。

ローズ

ララマザー芸術王国の隣、ウィンザー魔法大国の姫。シルキスとは幼馴染み。宝石と美少女が大好き。

第四章『暗黒の騎士　ダークスワニィ』より

ダークスワニィはとても楽しそうに、処女媚溝の長さを公表した。
新たに知らされた女体のヒミツに、周りの人々からは少女騎士を想うざわめきが起こり、そしてその全てが、白金のようなナイトスワニィの心を羞恥で灼いた。
（……うぅ…み、見られている……!!）
レンズに大写しにされたナイトスワニィの秘肉溝。そこは剥き卵のようにツルツルで真っ白い柔肉の丘に、桃色の極細溝がス…と一筋だけ通っていた。
処女の丘は産毛も毛穴もないスベスベの肉丘で、ホンノリと羞恥の桜色を浮かせ震えている。少女姫にとってこの場所は、密かなコンプレックスでもあったのだ。
しかし白騎士の処女秘処はその羞恥とは裏腹に、少女らしい清潔さ以上に神秘的な美しさと魅惑とを、見る者に感じさせていた。
「ふふ…白騎士様のおこさま性器…肉溝の中はどのような姿をしていらっしゃるのかしら……？」
淫らな暗黒騎士の命令で新たに出現した十数本もの糸触手のうち、五本ずつが左右に分かれて純白騎士の媚溝へと伸びてきた。ピチピチと腿裏を這い上り、処女騎士の秘処へと這い進んでくる。
「……ひきっ――っ!!」
（いっ、いやぁっ！　し、触手が……っっ!!）

腿裏の外を通り、お尻と脚の付け根を過ぎて、やがて内腿にまで触手を感じる。白金の意志を持つ騎士の心が、恥肉に感じる触手の生暖かさで追い詰められていく。

ピトリ。

「……ひっ――!!」

進撃を続けた十本の糸触手は、遂にナイトスワニィの牝肉に到着した。全ての触手が秘唇に食い込み、柔らかい肉の合わせ目を、ちゅくり…と開く。

三メートルのレンズ一杯に、ナイトスワニィの処女肉が拡大される。腸内と同じく朱い艶を見せる恥肉は、初めて受ける外界の灯りにヒクリと怯えたように収縮していた。

溝の上端で包皮に包まれた小さなクリトリスと、その薄皮から溝の中を左右に囲む、可憐な花びらのような小陰唇。

更に左右の花びらで包まれて複雑なシワを持つ柔肉中央に、針穴のようにくぼんでいる小さな尿口。媚溝の下端近くには、尿口と間違えそうなほどよく似た、穢れを知らない処女の膣口が息づいている。ずっと刺激を受け続けていた無垢な処女唇全体は、ヒクヒクとわななきながらもウッスラと恥蜜を纏って、幼く淫靡に艶を浮かせていた。

男性であるなら、誰もが犯してその締め付けを味わい、奥深くに精を放って自分だけのモノにしたくなるような、牡の征服欲を刺激してやまない姫騎士の処女美肉。

恥ずかしげに蜜液をこぼす微細でデリケートな花唇全体を、普段は柔肉の丘が左右から

ピタリと閉じて、ヒッソリと護っているのだ。
（〜〜〜‼）
そんな秘められた騎士少女の秘処が、淫液滴る魔獣の触手によって押し開かれて、多くの人達の目に晒されている。余りの恥ずかしさに、ナイトスワニィは強く目を閉じることしかできなくなった。
「こちらのヒミツも、大公開してしまいましょうか……うふふ」
糸触手の一本が処女騎士の股間に伸びて、包皮に包まれた小さな肉芽を根本から剥き身にする。
「――ヒっっ‼――」
お風呂での洗浄時以外自分でも滅多に触れない場所を、ヌルつく触手でチュルッと巻かれた。吸いつかれるような感覚に、全身が感電したようにビクッと硬化する。
小さな一カ所だけなのに、まるで全身を押さえられてしまったかのような感触。最も敏感な肉豆部分を締め上げられて、食いしばった姫騎士の歯間からも短い悲鳴が漏れてしまう。
囚われ騎士の秘唇に、暗黒騎士の指先が触れる。
「クリトリスは…三ミリほどの球体かしら？　普通よりも小さいようね。薄い小陰唇の高さは六ミリ…長さは二センチ少々……」

少女の秘処の様々なサイズが、黒騎士の手で次々と測られ、大きな声で読み上げられていく。恥ずかしすぎて耳を塞ぎたいのに、できない。

誰か男性の声が耳を突いて、少女は思わず目を開ける。そしてその瞳に映ったモノを見て、白騎士は絶句してしまった。

（……!!　――!!）

秘部を拡大するレンズを通して、こちらを見ている人達の顔がレンズ一杯に拡大されているのだ。まるで自分が小人にされて、秘唇の近くにまで顔を寄せられ、観察されているようにすら感じられる。

周りで注視する人々の呼気まで感じられそうな、自分の媚肉の香りまで嗅がれているような錯覚に、ナイトスワニィは気絶してしまいそうなほどの羞恥に襲われた。

「――うくっっ……!!」

しかし気が遠くなりかけると、豊かな双乳をタプリと揉み上げられて、強い性感に意識を引き戻されてしまう。気絶することすら許されない、恥辱の媚性器測定。

「クリトリスから尿口までが二・五センチ…尿口から膣口までの長さは七ミリ…膣から肛門までが二センチ五ミリ……あらあら、白騎士様はアソコの造りまで、小さめで可愛らしいのねぇ、あはははは」

秘処のサイズ測定が終わる頃、気絶と回復の間を何度も性感だけで行き来させられてい

た少女は、完全に体力を消耗しきっていた。
「……うぅ…ダーク、スワニィ……!!」
目の前の黒騎士に顎を取られても、小さくうめくことしかできない。しかし瞳だけは強い意志の光を宿らせて、凛とした輝きを放っていた。
「うふふ可愛い瞳……そうよ、もっと頑張って私に逆らって下さいな…ナイトスワニィ」
暗黒騎士の瞳が、邪に光る。
「そういうあなたでなければ、私があなたを弄ぶ楽しみがなくなってしまいますもの、こんな風にね……」
暗黒の騎士が更に浮遊して、自らの腰を白騎士の目の前に突き出す。V字鎧の股間前方空間に、包むように掌を添えると、その部分がニュルニュルと蠢き始めた。
銀髪の女騎士が愛おしそうな微笑みを浮かべると、黒い鎧はブクリと膨らんで急速に成長してゆく。そして――。
「!!　……!?」
「うふふ…どうかしら、お気に召して頂けますかしら?」
純白騎士の目の前で変形を終えた暗黒騎士の鎧。その股間部には巨大で黒光りする男性器が起立していた。鎧の魔法で創られたものなのだろう、赤子の腕ほども太さのあるペニスの表面には、銀色の魔法模様がビッシリと浮き彫りにされている。

黒棒の上面には小粒な突起触手が一列に並んで、根本まで生えている。先端はヘビの頭のようにボコリと膨らんでいて、先の口からは白い半透明な液体まで滴らせていた。
ダークスワニィは太棒を掴むと、ナイトスワニィの頬にスリスリと擦りつける。
（――ヒっ――っ!!）
半透明のネトつく液体は、魔獣の淫液以上に高い粘性を感じさせながら、少女の頬に押しつけられてくる。
初めて目にする魔法の男性器は魔獣達のペニスのようにクリアではなく、本物の凶器のように少女騎士の心に恐怖の刃を突き立てた。
「白騎士様の処女を奪う、魔法のペニスですわ、ふふふ……私のクリトリスとも感覚が繋がってますから、白騎士様のアソコを、タップリと楽しめますの、ほほほ」
（こ、こんな、もので……!?）
こんなに巨大なもので秘処を突き刺されたら、身体が真っ二つに引き裂かれてしまうのではないか。自らの死を想像させられ、白金のような勇気の意志が恐怖でガリガリと削られていく。
ダークスワニィが壁魔獣に手をついて、必死に藻掻くナイトスワニィの処女媚溝にペニスを押し当てる。
「ひぅっっ――!!」

初めて秘処に感じる熱棒の圧迫感は、魔獣達の触手とは全く異質な硬度と熱さを誇っていて、その余りに圧倒的な存在感に騎士少女は悲鳴を上げそうになった。
「あぁら、我慢なさらなくても、よろしくてよ……あなたの悲鳴、聞かせて頂きたいモノですわ、あはは」
「……け、穢したければ…お好きに、なさい――うぅっっ!!」
「うふふ、ではお言葉に甘えて……あなたの身体を使って、女の子を犯す楽しさを教えて頂きましょうか、あはははは」
純白少女騎士の強がりを鼻で笑い、暗黒姫騎士が腰を押し進めてきた。黒く艶めく魔法ペニスで、処女騎士の狭筒が圧迫拡張されていく。
(――いっ！　痛い…痛いぃっっ!!)
ムチムチと広げられていく白騎士の媚肉筒に、黒騎士のペニスがツプツプと太い頭を沈めていく。
「ゆ、勇者様！」
「勇者様が……!!」
苦痛に喘ぐ純白少女の姿に、見守る人達の中からも悲鳴が上がる。希望の少女剣士を助けたくても、しかし街の人々にはやはり、闘う術は残されていなかった。
レンズの中では、淫らな黒棒に押し広げられた白騎士少女の秘唇が、怯えるようにわな

ないている。
「うっふふ、入口は暖かくて柔らかくて、いい気持ち……中はどうかしら？」
「ぐふぅ――！　ぅくくっっ!!」
魔法ペニスでクニクニと入口付近をかき回すと、黒騎士は更に腰を沈めてきた。
人々の希望である白翼の少女騎士が、暗黒騎士のペニスで犯されようとしている。
「――く、ひぃっっ――!!」
（いやっっ、いやああぁっっっ!!）
大切な秘処に異物を押し込まれる痛みと恐怖で心が張り裂けそうになる。それなのに淫液に開発された身体は、感じさせられている痛み以上の、女性本能が求める「男性器に犯される」期待感に震え、更に恥蜜を溢れさせる。
熱い淫棒に押される処女の膣口は、少しでも早く強姦牡肉に貫いてもらおうと、自らムチムチと薄ヒダを広げ、最奥の子宮もコポリと淫蜜をこぼしてゆく。
少女の理性に反して、犯される期待に震えて喜ぶ、自らの身体。その感触の方が、少女騎士にはずっと恐ろしく感じられた。
（こ、このまま――犯されて、しまったら……っ!!）
処女の締め付けが限界まで押し広げられる。もう、ほんの少しでも押し入られたら、ナイトスワニィの純潔は呆気なく散らされてしまう。

「うふふ、ここが白騎士様の処女膜ね…それでは――」
「――ひっ――や、やめ――!!」
少女姫の心が恐怖で溢れてしまったその瞬間、白騎士の全身がガカッッと強烈に発光をした。
「!!　なっ、何ですの、この光はっ!?」
その光は輝きだけではなく、必殺技なみの破壊力まで秘めていた。強い光の奔流は白騎士に密着していた暗黒騎士を弾き飛ばし、その魔法鎧にまでダメージを与える。
ビュオオォォッッ！　ビガカッッビカァッ!!
「うわぁっ、眩しいっ！」
「か、風が……！」
一瞬にして広がった光の嵐は周囲に強風を巻き起こしただけでなく、辺り一面の魔獣達にまで光の剣を突き刺して、その包囲を崩壊させていった。
やがて光の嵐が静まると、周りにいた魔獣達は全て殲滅されていて、人質にされていた少女達も傷一つなく解放されていた。
突然起こった光の奔流、それは姫を想う魔法の白鳥が僅かに残された力を全て振り絞って少女騎士を脱出させた、シルキス姫すらも知らない最後の切り札だったのだ。
そして魔獣達を倒した光の翼は、遥か上空へと飛び去ってゆく。

「ふん、仕方がありません…今夜はこのくらいで、許してあげましょうか……うふふ」
上空から周囲を見渡したダークスワニィは、その光を追うことをしなかった。傷ついた鎧を着ていることがプライドに触るからだ。
それに今の大技を使った白騎士のダメージは、そう簡単には回復できないだろう。
「……私も早くお城に帰って、白騎士様と再会するための準備をしなくてはね、うふふ」
まだ事態が解らずに混乱する繁華街には一瞥もくれず、暗黒の魔法騎士ダークスワニィは天空へと飛翔していった――。

第五章『白翼の姫騎士　淫獣奉仕』より

粘つく淫液に胸肉が染められ、ヌルヌルと滑る熱いヌメりで谷間の性感が高められる。高鳴る鼓動と身体のくねり、ペニスの脈動が重ねられて、凛々しい眉根が八の字に下げられてゆく。淫らに変形する自分の豊胸と、深い谷間から送り込まれる牡の淫熱に、頭の中までが灼かれてしまう。

「…ぅ……ふぅ……」

（や……わ、私は……！）

漏れる吐息が艶を帯び始めると、自身の吐息にまでゾクリと官能が痺れそうになった。そんな自身の性感を振り切るように、ナイトスワニィは一心に魔獣への奉仕に集中する。そして――。

グゲガララッッ！

少女の官能に応えるように魔獣は籠もった咆吼を上げ、白く透けた高粘度の淫体液を放出した。

どブビゅるぶブュびビュっぶびゅブプぶるっっ！

「うぶっ……！」

（きっ、汚い……!!）

少女騎士の上気した胸が、桃色の髪が、凛々しい愛顔が、勇気のバイザーが、ブビュズプと吐き出される魔獣の精液でネットリと穢されてゆく。

粘性の高い淫精液は処女騎士の身体をユッタリと垂れ流れるが、トロリと糸を引いても石舞台の上に垂れ落ちることはなかった。
そして騎士を穢した魔獣の体内では、宝石精製の輝きが起こる。少女騎士の白い肌は淫液に張りつかれ穢され続け、更に元気まで奪われてゆく。
（身体に、胸に……かけられて…宝石まで……）
惨めな思いに打たれる少女の前に、新たなペニスが突き出された。
「ほぅら…魔獣ちゃん達を待たせちゃダメよ、ゆ・う・しゃ・さ・ま。くすくす」
「い、言われなくても……っ！」
（今は…耐えなければ……!!）
ナイトスワニィは新たなペニスにすり寄ると、自らの胸で再び牡熱肉を挟み込み、奉仕を再開する。ナイトスワニィのくねる背中が、不意に熱いゼリーペニスでツルリ…と撫で上げられた。
「ひゃふっっ！　な、何……っ!?」
背中を撫でられた瞬間、胸奉仕で刺激されていた全身の性神経が、ゴォッッと一気に燃え上がる。太い触手で更にベチュネチュと背中を撫でられると、性快楽からの逃げ場を求めるように身体が勝手にくねり蠢く。
更にお尻にまで違和感を感じて、処女騎士の背筋がビクリと跳ねた。

「ひ――っっ！」
（お、お尻に――きふぅっ!!）
お尻の谷間をペニスに割られ、リュルリュチュと硬棒で擦られる。ペニスで菊肛を刺激されると、肛門から背筋を抜けて、脳裏まで甘媚電に突き抜けられてしまう。
「女の子は身体全部を使って男性に奉仕するのが義務ですのよ…お口や胸だけでなく、自分でお尻を差し出しておねだりなさいな……おほほ」
「……は、破廉恥な――うぅ！」
排泄器官で男を誘うような、下品な振る舞いを人前で強要される。強い羞恥と怒りがこみ上げてくるが、人質にされた少女達のことを思うと、今は従うしかない。
タップリの巨乳で魔獣のペニスを撫でさすりながら、白翼の処女騎士は恥辱に震えるお尻を突き出し、クネリ…と左右に振ってみせた。
（こ…こんな、羞恥……!!）
汗と淫液で照り輝く尻頬が、引き裂かれたビキニを乗せたまま左右に揺れて、フルフル弾んで若い弾力を見せつける。お尻谷間の中央で息づく桃色の媚孔は、視線を感じて羞恥にヒクつき、隠れるようにキュウぅっと窄まった。
そんな恥態までもが、レンズ魔獣によって多くの人々に晒されているのだ。処女騎士にとっては、まさしく死よりも勝る、心が圧死させられそうなほどの羞恥であった。

少女の誘いに応えるように、凹凸に恵まれた熱太い硬牡肉がニュプリッッと肛門に押し入られる。
「うぅ――ぐぅ…！」
内臓全てを圧迫するような巨異物の侵入で、肛門は強い排泄欲に責め立てられる。しかし更に奥まで無理矢理制圧されると、排泄欲を大きく超えた充足感に、腸神経の全てが支配されてしまった。
（……お、おなか…くるしい、のに……！）
背後からの籠もった吠え声を受けて、ナイトスワニィは拙い肛門奉仕を始めた。突き出したお尻を前後させながら、同時に上半身も上下させる。
ペニスが出ていく時には、排泄の大きな解放感に刺激され、再び奥まで突き込まれる時には、余りの圧迫感に子宮までもが蕩けさせられる。
ヒザ立ちで前傾という不安定な姿勢のまま、弓なりになった全身を前後から挟まれて、恥辱の性奉仕を続ける白翼の騎士。
新たなペニスに唇をノックされた時、少女は黙って口内へとゼリーペニスを迎え入れた。そんな奉仕少女の全身に、更に他のペニス達が身を寄せ始める。巨乳先端の乳首を待機するペニスにつつかれる。別の魔獣からもペニスを突き出され、頬を撫でられ淫液を塗りつけられる。

「んぶぅっ……か、勝手に触れるなど――ぅっ!?」
更にナイトスワニィのお腹に熱硬いペニスが押し当てられる。先端から糸引く淫液をテロリ…と垂れ流す透けたペニスで、お腹の上から子宮をスリスリと擦られてしまう。
「やっ、やめ――んぶぅっっ!!」
（お、お腹が、お尻が……熱いぃっっ!!）
抗議する唇が再び牡肉に塞がれる。胸の谷間やお尻だけではなく、背中や乳首、お腹の上から全身を舐られる。
次々と押し寄せるペニスの群れに、白騎士少女の理性は追い詰められてゆく。
「ぷふっっ――!!　んむぅ…！」
先端がブラシ状になった触手に、自分でも意識して触れたことのない会陰（えいん）を不意打ちされて、ナイトスワニィは思わず艶声を上げてしまった。
大人の指二本ほどの太さがある触手の先端部は、歯ブラシのように細かい柔触手が生えている。その滑らかな密集触手で、肛門から処女秘処までの間の、敏感すぎる柔肉をワチュワチュとしゃぶり上げられたのだ。
「ふぐ…ぅっっ――ふふぅぅっっ!!」
（やっ、やめてっ……そんなところぉっっ!!）
強い刺激に全身の筋肉が弛緩してゆく。そんな獲物の弱った反応を魔獣が見逃す筈はな

い。少女の頬を淫液で穢していた数本のペニスが、我先にと桜色の唇に殺到した。
「んぶっ――ぐぶん～っ!!」
（！　こ、こんなにっ――っっ!!）
ジュぷルぢュッ、ぎゅブルちゅくッっ！
ゼリーペニス達に次々と口内の暖かさを堪能されながら、ビュウビュウと淫らな体液を吐き出され、飲み込まされる。白騎士少女は口腔から喉の奥、胃の中までを、黒騎士の淫液だけでなく魔獣達の快楽淫液にまで穢されてゆく。
「んぐぐ～～～っっ!!」
（いっ、いやぁっ――汚いぃっっ!!）
淫らな意志に支配された熱臭いヘビ達に口中を蹂躙され穢される。透けた男根に犯される口の中までレンズ魔獣で大写しにされ、少女姫の心は更に羞恥で灼かれてしまう。
白金のように気高く、強靭だった勇気の意志が、抗いようのない恥辱の圧力でメキメキと歪まされ、へし曲げられてゆく。
「んんっ!?　んぷひゃむ～！」
破れて張りつく腰布の下で、ブラシ触手に性感を開発され続ける会陰。そのすぐ上で人目に晒される奉仕媚肛。
ねちゃっニュプルッ、ずチュぶっヌルちゅっ。

「ひむゅっっ――ぐんん～～っっ!!」
見た目からは想像もできないほど、生々しい熱を持った魔獣の疑似男性器。硬い熱棒に肛門のシワが伸ばされ、腸内を自由に抽送される。
（お、おなかの……奥ぅ……！）
口から胃袋、胸と背中、お腹とお尻、更に会陰責めと、処女子宮への淫熱包囲網は、確実に完成されてゆく。
「んひぶぅ、んるぶん～っっ!!」
散々淫液で開発された騎士少女の菊座は、突き込んでくる魔獣のペニスに翻弄されながらも、少しずつ歓迎の方法を覚え始めていた。
（おしり……おしりが、勝手に……!!）
恥辱で犯されるお尻が魔獣に屈し、汚れた性快楽に手なずけられてゆく。
ビュぶルぶゅッ、ぶチュびゅぶプぶュぶぷっっ！
ニュムリュルと揉み上げられる八十六センチの双乳谷間でペニスが放精すると、再び淫らなペニスがズチュリッと柔山に挟み込まれた。
（あふっんっ――!!）
心臓に熱いペニスを直接当てられたような熱感に、早鐘を打つ心臓が更にドクンッッと跳ねる。内と外から全身を舐られ、処女孔以外の全ての場所をオモチャにされる、柔媚肉

の白翼騎士少女。
魔獣達の不埒な淫触手群に翻弄される少女の姿を見ながら、人々はただナイトスワニィを信じることしかできなかった。
「勇者様……っ！」
「くそぅ…ダークスワニィめぇ……！」
闘う力のない人々の怒りと視線が、暗黒の騎士を突き刺す。
「ですってよ、ナイトスワニィ……くすくす」
白騎士を想う人々の苦しみに、ダークスワニィは横柄な笑顔で挑発して返した。人々の声が耳に届くと、少女騎士の瞳には使命感が戻る。
（り…良民達を、護らなくては……！）
ナイトスワニィは全身の力を抜いて、魔獣達の突き込みに身を預けた。どんなに恥辱を感じても、自分からは身を投げ出す以外、今は方法がないのだ。
ゴブジョギョブッッ！
全身が従順になった獲物騎士に対して、淫らな怪異達は更に激しい責めを課してきた。
口が、胸が、お腹が、会陰が、肛門が、倒すべきジュエル魔獣のペニスに蹂躙されて、小柄な少女の全身が大きくグラインドさせられる。
（み、皆さんを……まも、る……！）

神経を淫液に灼かれながら、全身を強くガクガクと前後に揺さぶられ、魔法騎士の思考力がゆっくりと奪われる。ヌルつく熱いペニスで身体中を舐られる感触に、全身が歓声を上げ始めている。

白金のような勇気の意志から肉体が切り離され、魔獣の送る性快楽に従い、一緒になってナイトスワニィの理性を追い詰めてくる。

（わ、わたくしの…からだが……！）

舌が勝手に魔獣ペニスと絡み合い、唇の外でヌチュプチャと淫らな粘糸を引き伸ばし合う。脇の下や腿の裏側まで触手にペチョリッと舐められた瞬間、純白の騎士は背中の性神経をゾルリッと灼かれ、もう声を堪えることができなくされた。

「いひぅぅっっ――！　か、身体、からだぁっっ!!」

強烈すぎる全身への責めに、脳神経までが揺すられてしまう。胸も、腰も、ペニスに従い、ユルユルと従順で拙いグラインドを始めてしまう。

「こんな、こんなのぉっっ!!」

（ど、どうしてっ――からだが、おかしいぃっっ!?）

奉仕はしても、従ったつもりはないのに――。

余すところなく疑似男根に全身を責められながら、少女はお腹の奥で強い空疎感を感じていた。口や胸、肛門どころか会陰までをも責められながら、未だ凌辱の魔手に晒されて

いない、処女の秘処。女の身体に潜む本能的な充足感を得られないことで、性に疎いナイトスワニィの身体は、暴走を始めさせられていた。
処女騎士の唇に、魔獣のペニスが射精をする。
どぶビゅっ、ぶプぶぷビュぅっ！
「んぷあぁっっ、舌っ――ああ熱いいぃっっ!!」
（あつくて……もやされてっ――!!）
口に吐き出される淫液を舌が受け止め、勝手に飲み込み、喉を灼かれる。そんな刹那の性快楽は、少女の身体に更なる空疎感をもたらしてゆく。
ズぶビュぶっッ、ドぶプびゅぶっっ！
豊かな双乳谷間で放出された淫液は、触手達によって上半身全体へと、淫らに塗り広げられる。胸全体から先端の桃色突起までをコネ回されながら、穢されてゆく上半身が、快楽に震えるのを止められない。
びゅぐビュッ、ぶジュびュるルるっっ！
「ひぐっ――くうぅっっ！」
（なかぁっ、おしりのなかぁっっ!!）
お尻の奥でペニスに満足されて、礼だといわんばかりに射精を受ける。腸内を支配する魔獣の男根が蠢動（しゅんどう）をすると、その淫らな跳ね上げに合わせるように、ナイトスワニィの腸

がキュウッッと魔獣を食い締め、媚びを売り始めた。
騎士少女の身体を楽しんだ魔獣の体内では、次々と宝石が精製されてゆく。満足した魔獣のペニスが糸を引いて引き抜かれると、間髪入れずに新たなペニスが押し込まれる。
（……まだ、いる……）
人々の目の前でナイトスワニィの身体がクネクネと揺れて、新たに差し出されたペニスに自らすり寄り、迎え入れてゆく。更にヒザ立ちになって身体を反らし、突きつけられる魔獣ペニスを左右それぞれの掌で、優しくスリスリと擦り立て始めた。
「ゆ、勇者様……」
「勇者様が、自ら……⁉」
「ちっ、違うぞ！　あれはきっと、我々のために……！」
少女の恥態を見せられた人々の間に、動揺が広がる。しかしそんな拙い媚態に誰よりも驚愕したのは、ナイトスワニィ自身であった。
（わ、わたくしの……からだが……‼）
差し出される魔獣の男根にオズオズと、しかし勝手に舌や掌が伸びてしまう。
谷間を埋める淫熱棒に合わせて、胸が自然に揺さぶられる。肛門に攻め込む太肉を腸壁が勝手に歓迎し、更に突き込んでもらおうと様々な場所で侵入者を締め付ける。
ずチょっズびゅルっッ！　ぷチュずっ、びチュずっっ、るちゅずビュっ！

バラバラに動く突き込みに対して、白騎士の身体はそれぞれに動きを合わせることまで学び始めていた。
「うくうぅっっ――く、口が、はあぁっっ――胸ぇっっ……んぶうっ――お、お、お尻っ、おしりいぃっっ!!」
（とまらないぃっ――わたくしの、からだがっ、とまらないぃぃっっ!!）
理性を押し潰され飢餓感に突き動かされる身体は、次々と襲い来る汚らわしい魔獣太肉に媚びを売り、悦楽を求める。しかし満たされることもないままにただ身体だけを弄ばれて、宝石を精製されて、気力を奪われてゆく。
淫らな怪異から人々を護る白翼の騎士ナイトスワニィの身体は、今や闘う力を失い、自らを護ることすらできなくされていた。愛らしい顔が、しなやかな指が、豊かな胸が、秘すべき美肛が、人々の目の前で自らの性奉仕により魔獣の白濁で穢されてゆく。
そんな純白騎士の姿に、ゾグソクと武者震いをする暗黒の騎士。
「うふふ…あなたの宝石から生まれた魔獣ちゃん達が、全員あなたから宝石を精製するまで、狂っちゃや～よ、ナイトスワニィ。あははは」
ぶじゅルぴゅブぷぷっ、るぶビュブぷぷびゅウぅっっ！
最後の魔獣に放精されて、獲物の騎士は赤魔獣達への性奉仕から解放された。そして再び壁魔獣の触手に絡め取られる、力無き少女。

壁魔獣の天面が波打ち、直径三メートルほどの円形へと変形をする。そしてナイトスワニィは、下からも透けて見える円舞台の上に降ろされると、首輪からも解放された。
（……今度は…何を……？）
高さ四メートル以上の舞台では、たとえ拘束が解かれていても、疲弊した今の身体では逃げ出すことは叶わない。困惑する純白の騎士に近付くダークスワニィ。
「ふふふ、まだイってないから、正直ツライでしょう？　くすくす」
「…うぅ…ぁぅ……」
止めどのない性快楽の奔流に呑み込まれ続けながらも、頂点にまで叩き上げられることはなかったナイトスワニィ。子宮の中では飢餓の淫熱が嵐となって吹き荒れ、少女の理性は追い出されそうなほどに圧迫される。
（……こ、こんな……私の…身体は……！）
元気は宝石に精製されて吸い取られ、体力は失われながらも、未だお腹の奥深くでは淫熱の炎が燻り続けている。気持ちばかりが、焦燥させられてしまう。
暗黒騎士はふふっと微笑むと、半裸騎士の両手首をキュッと掴み取った。
「…は、離し……くぅ……！」
魔力も体力も失った身体など、ダークスワニィには人形に等しい。ナイトスワニィは無理矢理仰向けに組み伏せられると、怪異の女王に唇を奪われた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/